支部だより

CPIJ Branch Letter

中部支部

北京の都市計画研究者を招いた国際交流講演会開催報告

中部支部では、平成 21 年 3 月 24 日に名城大学アジア研究所、（財）名古屋都市センターと共催にて、中国・清華大学建築学院・教授の 譚　縦波 氏を招いた国際交流講演会を開催した。譚氏は『北京都市計画と開発の今』と題して、北京の変容を都市計画と都市開発の観点から 6 つのテーマで講演された。その要旨を報告する。

首都北京

北京のイントロダクションとして、文化財も多い歴史都市でありながらオリンピック開催や都市開発で華やぐ新旧混在の都市イメージ、遊牧民と農耕民の対峙する最前線の軍事拠点として建設されたという都市起源、人口推移や GDP 規模などの諸データの解説があった。

北京都市計画と建設の流れ

10 世紀に建設された北京城が、明・清朝時代に発展して現在の北京のベースが形づくられ、さらに旧市街を中心に同心円的拡張を志向した 1950 年代のプランが、1983 年及び 1993 年のマスタープランへと引き継がれていく一連の流れが示された。1993 年のマスタープランは、クラスター型の市街地配置やグリーンベルト構想など、一極集中で膨張を続ける都市構造の改編を意図しているものの、現在も一極集中の都市構造は解消されておらず、また、軌道系インフラの整備が不十分なため、慢性的な交通渋滞が問題となっているとの指摘がなされた。

現在の北京都市計画

現行の都市計画体系として、経済計画系、都市計画系、国土計画系の 3 つがあり、都市が定める都市計画系の法定計画としては、マスタープランと詳細計画の 2 つがある。2004 年の北京マスタープランでは、分散型の都市構造の構築に向け、11 のニュータウンが計画されていることが特徴である。また、詳細計画には 2 種類ある。コントロール型詳細計画は、主に、用途、高さ、容積率について定める規制誘導型のゾーニング計画で、2006 年には北京市域のうち 1,088km^2 をカバーした。中心部の旧市街を保全し、その外側に開発を誘導するような規制となっているため、盆地のようなスカイラインが形成されつつある。一方、事業型詳細計画は、新規の開発計画や再開発計画に該当する。

また、グリーンベルト計画や道路計画、地下鉄計画の紹介があり、北京においても都市の成長管理や公共交通への転換が取り組まれていることが報告された。

オリンピック北京

総投資額 2,800～4,000 億元とされるオリンピック関連事業について、“鳥の巣”を始めとした競技施設や、公園、道路、空港、駅舎などのインフラ整備を中心に、新しい北京の姿が豊富な写真で示された。

遺産北京

譚氏によれば、開発と保存の問題が、北京の都市計画・都市開発の焦点となっているという。そして、古都保全計画が作成され、高さ制限や歴史的建造物の保存が行われているが、開発圧力の強さから十分に機能していないとの指摘があった。また、譚氏は、歴史風な町並み再現の是非といったオーセンシティの問題にも触れ、偽物づくりよりも空間のスケールや日常の生活景の保全が重要と説いた。

国際都市北京へ

ポスト・オリンピックとして、今、北京ではマンモス都市圏の形成や多中心構造への転換、さらに遷都の可能性などの検討とともに、国際都市への道が模索されている。北京が真の国際都市となるには、外国人が快適に暮らせる街、即ち、多様な都市生活が享受できる街であることが肝要との指摘がなされた。

譚氏は、日本の都市や都市計画との比較を交えながら、北京の都市計画・都市開発を客観的な視点で解説され、また、北京が直面する都市計画的課題に対して、ヒューマンスケールや人の感覚に依拠したコメントをされていたのが印象的であった。

（当報告は三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング㈱ 副主任研究員 今村洋一が担当した。）